

---

# 抱えきれぬ想い ルーフェイア・シリーズ03

こっこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

抱えきれぬ想い ルーフェイア・シリーズ03

### 【NZコード】

N9282D

### 【作者名】

「つ」

### 【あらすじ】

たどり着いた、明るい夢の場所。だがなお、過去の影はまとわりつく。心優しい美少女が繰り広げる、異色の学園ファンタジー 第3弾 学院へと来たルーフェイアと、出会った先輩との物語です。世界観や基礎技術も出できます 「無情という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ 携帯版は1行毎の改行です 7桁Hitサイト掲載の第3作です

Lo a side

街はもつ、いつもの知つてゐる街ではなかつた。

時折響く砲撃の音とともに、建物がえぐられ、崩れしていく。

道路に人影はない。ところどころに倒れている者がいるだけだ。その中を、母に手を引かれながらロアは走つていた。

その少女を見下ろす、今の自分がいる。

(また、夢……)

今まで幾度、この夢をみただろう? だからこの後どうなるか、すべて知つていた。

「ロア、いい? 」この道路を渡るけど、とまつちやダメよ?」

「うん、わかつた」

母の背には、まだ幼い妹が背負われている。

妹は2歳だった。

十字路の手前、建物の陰で親子は立ち止まる。

「いち、この、さんで行くからね?」

「うん」

母親は背負つていた妹をいつたん下ろし、今度は大切に抱きかかえた。

そして辺りを見回す。

「行くわよ……いち、この、さん!」

母親が飛び出す。

次いでロアも。

教えられたとおり体制をくぐして、できるかぎりの速さで。  
だが。

「あつ……！」

砲撃で荒れた舗装に足を取られ、転倒する。

「ロアー！」

娘を気遣つて母親が立ち止まり、振り返った。

「早く、こっち！」

そこで言葉は途切れ、鮮血が散る。

「ママ……？」

じそりと顔を立てて、母は倒れた。

「ロア、だめ……逃げて……」

「ママー！」

慌てて駆け寄る。撃たれなかつたのは、奇跡かもしれない。

「ママ……ひつーー！」

母親と抱かれている妹の背から、信じられない量の血があふれ出  
てくぼみに溜まった。

思わずあとずさる。

「ロア……逃げ……な……」

それが最後に聞いた母の声だ。  
そして、田が覚めた。

(……あーあ。夢見、サイテー)

もつあれから8年も過ぎてこるのに、まだ時折この夢を見る。

(でも……やつぱ、しょひがないかな?)

一生忘れない記憶。

それならきっと、一生この夢は見続けるだろ。

ベッドの上に起き上がる。

「やあて、今日の予定は、つと  
わざと両に出した。

単純と言えば単純だが、この方法はけつひへ、ブルーな気分を吹  
き飛ばすのに効果がある。

「自主学習ばつかだな……つて、夏休みじゃあたりまえか。で、午  
後は……あ

スケジュールを見てやつと想い出す。

「やつぱー、新入生の案内するのに、なにも用意してないーーー!」

Ruffer

「す、じい、こ、こが……シエラ学院？」

圧倒されながら見上げる。

アヴァン国から船でユリアス国に入つて、そのあと列車に乗り継いで、ケンディクに着いたのが三日前。そこで一回イマドと別れて、あたしはシエラのケンディク分校で、簡単なテストをいくつか受けた。

今朝はその結果が出て、本校への入学許可がおりたところだ。

でも次にどうすればいいのか分からなくて、困ってしまった。簡単に「港で連絡船に乗つて」と言わっても、その連絡船が分からなかつたのだ。

イマドが迎えに来てくれたから、まだあたし、船にも乗れてなかつたと思う。

「けつこう、大つきいだろ？」

「うん」

噂には聞いてたけど、ホントに島を丸ごとだ。切り立つた崖の上が緑で覆われて、その中に石造りの建物と尖塔などが見える。

世界中にMES Mercenary Schoolの略と呼ばれる傭兵学校は、かなりの数が乱立してゐる。中には上流階級の子弟専用のMESまで、あるくらいだ。

人気の理由は、ここの中の卒業生は徴兵が免除されるからだ。普通なら上級学校を出たあと兵役を果たし、それから大学や就職になる。けどMESを卒業すれば同等の訓練は終わつたとみなされて、その

まま大学や就職に進めた。

これが有利だと、Mesに子供を入れようとする親は多くて、結果として乱立に繋がっている。

ただこのシエラ学院の、中でも本校は別格だつた。

「もつとも古いMes」と称されるこの学院は、創立二百年。起源はさらに遡つて、コリアス国がまだ、国内で領主同士争つていた時代になる。今のケンディクに所領を持っていた領主が、領内のゴロツキを集めて訓練し、傭兵としたのがその始まりだという。

その後本格的な訓練施設になり、成り行きで多くの孤児も送り込まれるようになつた。ただ当時の環境は悲惨で、ここへ送られるくらいなら町でスリでもしてたほうがマシというほど、過酷だつたらしい。

状況が大きく変わつたのは、コリアス国の統一時。首都イグニールに居を構える一族と、ケンディクに地盤を持つ一族とが講和条約を結び、縁戚関係を持つことで内戦の時代は終わつた。

そのため例の訓練施設も不要になつたのだけど、これに目をつけた人物が居た。シエラ学院の、初代院長だ。有力な貴族なだけなく慈善家で商才もあつたその人は、この群島をまとめて買い取り、傭兵学校を開いた。

國中から孤児を集め、教育し、訓練し、時に在学のまま兵力として売り出す。卒業生はもれなく、軍なりへ就職の斡旋と称して売る。内戦の時代は終わつたものの、各地で凶暴な竜族その他が暴れているのは相変わらずだつたし、内戦に代わつて国家間の小競り合いが始まつたこともあつて、この田論見は大当たりだつたそうだ。

もちろん賛否両論だつたけど、当時はまともな孤児院さえ少なか

つた。まして孤児がきちんとした教育を受けられる場所など他になく、文字通りシエラは孤児たちの、最後の頼みの綱になつたのだといつ。

今は学院の分校がケンティクや首都のイグールはもちろん、アヴァン国なんかにもあるし、金持のための「箱付け専用」分校まであるらしい。

「この本島に、寮と校舎あつてさ。実地訓練なんかは別の島でやるんだぜ」  
「そうなんだ……」

いちばん古いM e Sというからには、それなりだろつとは思つていたけど、予想以上に本格的らしい。

その間にも船はすぐるようすに海を進んで、船着場へ着いた。意外と大きくて、幾つか高速艇まで停泊している。

「氣をつけろよ、時々落つてゐるバカいつから  
「うそ……」

揺れる足元に氣をつけながら船を降りて、歩き出した。  
切り立つた崖の間の、坂道を登つていく。だんだん視界が開けてくる。

「きれい……」

曲線がいろいろ、滑らかな肌の建物。東西南北と中央、合わせて五つの尖塔。  
手前の庭や周りの木々もきれいに手入れがされていて、縁の間に花が咲いている。

石畳の道と、あちこちに置かれたベンチ。  
あたしと同じくらいの子や、もつと上の人なんかがたくさんいて、すくなく賑やかだった。

「……なんか、夢みたい」

ほんの何日か前まであたしがいた世界と、まったく雰囲気が違う。  
「でも、夢じゃない……よね？ あたし、ここに行けるんだよね……？」

なんだか不安になつて、イマドの方へ振り向いた。

「夢なわけねえって。

「おい、頼むからここ泣くんじゃねえぞ。おれが泣かしたと思われるかんな」

「だいじょぶ……」

「イマド、けつこう言つことがひどい。」

そのまま歩いて、彼は玄関のところで受付の人と話しかけた。

「すいません、こいつ、ルーフュイア＝グレイスって言つんですねけど。連絡来ますか？」

「おかえり、イマド。今年はいつもより、早く帰ってきたんだね」

言ひながら受付のおじさん、何か紙をめぐる。

「ルーフェイア……ああ、このはだね。

ちゃんと聞いてるよ。ここのまま真っ直ぐ、学院長室へ行きなさい。予想と違つて、あつさつ通してもらえた。分校からきちんと、連絡が来てたらしい。

それにしても。

あたしが特殊な事情で本校へ入学すると、ちゃんと知らせが行つてたつていうのが不思議だ。本校の学院長経由だと分校の人は言ってたけど、よくそこへ話が行つたと思つ。

まだアヴァンのほうは戦闘直後で混乱してたのに、母さん、どうやつたんだろう?

「いいか、あの昇降台でいちばん上だからな、学院長室」

「わかった。ありがと」

「イマドと別れてひとりになつた。

明るい廊下。置かれた縁。笑いながら行き交つ生徒たち。

あたし、ほんとにここにいて、いいんだろうか?

なんだかすゞぐ、場違いなような気がしてくる。

あたしの知つてゐる世界は 武器と魔法と、血。ものじこひついた時から、戦場がすべてだつた。

たしかにここはただたるシホラ学院でMeditだけど、それでも戦場とは違つ。

もつとずっと穏やかで……けど、あたしは……。

イマドに言われたとおり昇降台の前に立つて、手をかざす。見たことがないほど旧式の造りで、とちゅうで浮力を失つて落ちたりしないか、ちょっと心配だ。

開いた扉から乗り込んで最上階を表す石に手をかざすと、ガタンと揺れてから、昇降台は動き出した。

不安だった。

自分の両手をみつめる。

この手に太刀を握つて、どのくらいになるだろう？  
あたしは息をするくらい自然に、人を殺せる。そんなあたしが、  
「」で上手くやつていけるんだろうか？

けどそんなあたしに関係なく、昇降台は止まって扉が開いた。  
豪奢な絨緞が敷かれた廊下。がつしりした扉が、いくつも並んで  
いる。

「えつと……」

なんだか気圧されながら、案内板と扉の上の部屋名とを比べて、  
院長室を探し出した。

そつとノックする。

「どうぞ、開いてますよ」

おそるおそる重い扉を開けると、広くて大きな窓と、その前に立  
つ人影が田に入つた。

「いらっしゃい」

なんだか優しそうなおじさんのが声をかけてくる。

「わたしがここ」の学院長のオーバルです。

ルーフィア＝グレイス＝ショマーですね？」

「フルネームは、やめてください」

さすがにこれは許容できなくて、即座に言い返す。ショマーの名は、簡単に口にできるようなものじゃない。

「……やつでしたね。カレアナからも聞っていたのに、忘れていました」

カレアナといつのは、母さんのファーストネームだ。どうやら「この学院長と母さん、ホントに知り合いだつたらしい。

それならあたしの細かい事情も、たぶん母さん話してるんだろう。

それがいいのかどうかは、わからぬにけど。

そのあとサインだけして、入学手続きはあつさりと終わる。ほかにクラス分けのテストがあるらしいけど、年度途中の特例入学のせいで、後日改めてだそうだ。

ただ、そのあと学院長の話が長かった。

「連絡をもうつた時は驚きましたよ。なにじり15年ぶりくらいで

したから」

「はあ……」

15年前なんて、あたしまだ生まれてない。

「まあカレアナはあまり、変わってないようでしたけどね。でも向いつけ、まさかわたしがシヒラの学院長をやっているなど思つても

見なかつたようで、驚いてましたっけ

「……そり、なんですか……」

たしかあたし、ここに入学手続きにきたよつな……？

「それにしても音沙汰のないつちに、こんな可愛いお嬢さんが生ま  
れてたとは」

「……ありがとつ」やむこめす

なにをどう答えればいいか、分からなくなつてくる。

「なんでも、カレアナがいろいろ言つてしまつたが……」

「！」

瞬間、驚くより早く、目に入った映像に對して身体が反応した。  
とつさに小太刀を投げつけて隙を作り出し、逃さず一瞬で間合い  
を詰めた。そのまま間髪いれずに、学院長の右手首に手刀を叩きこ  
む。

学院長の手から、銃が落ちた。

「いたた……はは、さすがシユマーの総領家ですね。話は嘘ではな  
かつたようです。驚かせてすみませんでした」

手首をさすりながら、学院長が笑つて言つた。

どうやら試されたらしい。

「あ、えつと、その……すみません。骨、だいじょつぶ……ですか  
？」

たぶん骨が碎けるほどの力は入つてないはずだけど……とつさだ  
つたから自信なかつた。  
もしかしたら、ヒビくらい入つたかもしれない。

「ええ、どうやら大丈夫のようです。

それにしてもこれでは……今までいろいろ、辛かつたでしょ？」

「え？」

言われた意味が分からず、そのまま考え込む。

学院長がそつと手を伸ばして、あたしの頭を撫でた。

「もつと普通に、友だちと遊んだりしたかったでしょ。でもこれからは、きっと出来ますよ」

「あ……」

涙がこみ上げる。

いちばん夢見ていたもの。

けどいちばん遠いと諦めていたもの。

それが今、目の前にあった。

次々と涙がこぼれる。

学院長が黙つて、あたしを抱き寄せた。

「うう……」

動かしたせいだろう、手首を押されて顔をしかめる学院長に、血の気が引く思いになる。

「だいじょうぶですか？！」

やつぱりヒビが、入ったかもしれない。

「あの、学院長、どこかで……診てもらつたほうが」「そうですね。一応、診療所へ行つて、検査でもしてもらいますか」学院長の言葉に内心驚く。思つてた以上にこの学院、至れり尽くせりだ。まさか検査の出来る医療施設まで、あるとは思わなかつた。

「ついでに寮まで案内しますよ。行きましょう」「はい」

いつしょに昇降台で一階まで降りる。  
廊下は変わらずにぎやかだつた。

「夏季休業中で、正規授業はありませんからね。この時期は騒がしいのですよ」

あたしの思いを察したのか、学院長がそんな説明をしてくれた。

「あ、院長だ！」

あたしと同い年くらいの生徒たちが、集まつてくる。

「うつわ、すげー美少女」「なになに？ 新入生？」  
取り囲まれた。

「ねえ、どこから来たの？」

「え、あ、えっと……」

初めてのことに対する疑惑つてると、学院長が助け舟を出してくれた。

「ほひほひ、困つていますよ。彼女はルーフュニア、これから学内を案内するところです。

それよりあなたたち、そろそろ次の自主学習が始まる時間じゃあ

りませんか?」

「あ、ほんとだ」

「やばつー」

わつと彼らが駆け出して、急に廊下が静かになる。

どいやらこの学校は普通と違つて、夏休みでも「自主」と称して、ある程度授業が行われてるみたいだつた。

そんな中を、学院長と並んで歩いてく。

「こちらが正面玄関ですね。おや、来るときにも通つた? それは失礼しました。

」の棟は、事務関係が集中しているんですよ」

窓の外を指差しながら、いくつもある棟を、院長が順番に教えてくれる。

「あちらこ、建物が幾つも並んでいるのが分かりますか?

こちばん奥の一つは、左が低学年、右が中学年の校舎です。手前の少し低い建物は、高学年の校舎。

あなたはまだ低学年ですから、奥の左側ですね」

どれも似たようなデザインの建物だから、最初のつちは間違えそうだ。

「ちなみに管理棟のすぐ後ろが、講堂と図書館です。あと陰になつて見えませんが、食堂と診療所がありますよ」

言いながら学院長が、廊下を曲がつた。

講堂と図書館の間を抜けるとたしかに説明どおり、小さめの建物が一つ見えてくる。ガラス張りのほうが食堂みたいだから、残りが診療所だろう。

その前で学院長が足を止める。

「ここからまっすぐ行つた、校舎の手前が寮です。

入り口のところに受付がありますから、細かいことはせんじで訊いてみてくださいね」

「はい」

それから学院長は、痛そうに手首を押さえながら、診療所に入つていつた。

何もないといいんだけど。

来た初日に学院長にケガをさせるなんて、きっとこの学校初だらう。あとで結果が出たころに、もう一回謝りに行つたほうがいいかもしねれない。

そんなことを考えながら寮へ行こうとして、あたしは思いなおした。

食堂のまわりに足を向ける。

まだお皿には早いけど、暑い上に学院長の話をすいぶん聞いてたから、喉が乾いてた。

人の出入りもあるし、行けばなにかあるはずだ。そう思つて食堂のドアに手をかける。

でもなんか、妙に騒がしい。

それに、この気配……。

食堂の中から感じる独特的の気配は、精霊を召喚する時のやつだ。

「こんな狭いところで、呼び出すなんて。

常軌を逸してるのでこのことだ。あんな威力があるものを部屋の

なかで呼び出したら、よくて巻き込まれて大ケガ、へタすれば建物ごと吹き飛ぶ。

ともかく止めたほうがいいと思って、あたしは建物の中へ急いだ。



Lo a s a i d

「ほんと、エレニアありがとね。どうにか間に合いそう」「よかつたわね。新入生がつかりさせたら可哀想だもの。それで、同室なんでしょ？」

「うん、そーなんだよね」

昼食には早いものの、一仕事終えたロアとエレニアは、食堂でおしゃべりに興じていた。

「まさか、夏休み中に新入生が来るなんて、思わなくてさ。あーあ、これで独り部屋ともサヨナラかあ」

「ロアつたらよく言つわよ。もともと一人部屋なのに、部屋換えのたびに記録に細工して、うまつてるよつに見せかけてたんじやない」「それ、言わないでつてば」

新入生の世話は、同室の者の役割だ。そのため空きは年長者の相部屋から、順に埋まつていく。

だがロアは気楽な独りが好きで、新入生が来る春はいつもこつそり記録を書き換え、相部屋に誰も入らないようにしていたのだ。とはいえずつと記録がそのままでは、怪しまれてしまう。そのためシーズンが過ぎると元に戻していたのだが、今回はそれがアダになつた。

「それにしたつて、珍しいよね。普通は最低でも春までは、分校にいるはずなのに」

「そうよねえ」

シエラ学院はもともとが特殊なつえ、本校は分校からの選りすぐりが集まっている。授業の進度も速いし、何よりある程度の訓練が

されていなければ、実地で即座に落ちこぼれだ。

だからここへの直接入学はほとんどなく、年に一度、選抜試験を通り抜けた分校生が、春に入ってくるだけだった。

「まあ、よっぽどテキるんだろうけど」

それしか理由は考え付かない。

「そうだとしても、実技をどこで覚えたかよね」

エレニアの言うとおりだつた。学科のほうはまだ分かる。世の中やたらと勉強が出来る人間は、一定数存在するものだ。

だが実技はそうはいかない。だいいち戦闘技術など、普通は身につける術えない。

「少年兵上がりとかかなあ？」

「それも珍しい気がするけど」

実戦で鍛え上げられたなら、実技の「テキ」の説明はつく。が、それだと今度は学課の説明がつかない。シエラの本校へ直接入れるほど戦闘慣れしているようでは、正規教育など受けていないはずだ。

「……よく分かんないね。まあ、会えば分かるか」

ここで考えても仕方ない。悩むのが苦手なロアは、そう結論付いた。

「それでその子、いつ引き取るの？」

「俺」「ころつてたかな。でもイザとなつたら、連絡あるだろ」  
言いながらロアは、耳飾りに仕立てた通話石をいじる。

学院が生徒に無償で貸し出している通話石は、何かと便利だ。こういう場合に呼び出してもうれるし、いろいろ制限はあるものの一対一の直接通話も出来る。

そのほかこの石を使ったシステムは、映像の送信などにも応用され、いまや文明の根幹を成す技術になつていてる。

「名前は聞いたの？」

「いちおづルーフィア＝グレイスっていう女の子、までは聞いたんだけどね。でも、それだけ」

「ふうん、そうなの」

食堂の向こうのほうでは、なにやら食料の争奪戦が始まつたようだが、一人は意に介さなかつた。

食べ盛りが多い学院では、この手のコトは日常風景だ。時には魔法や武器を使って、実戦をながらの奪い合つが起つる」とわれある。

「けどむ、こまさらチビの面倒見るなんて、思つたりめんじくさくて。あーもうヤダヤダ」

「そうでもないわよ？ けつこつ可愛いんだから。」

まあ確かに、その子の性格でかなり左右はされるけど あ、外行かない？」

「 そうじよっか

二人はテーブルの上のトレイをそれぞれ手にとつて、立ち上がつた。

後ろのほうで「バカやめろ」とか、「早く逃げろ」などとこつた声が聞こえてくる。

「まつたく、昼食」ときで精霊呼びだすなんて、  
その時、見慣れない少女がすれ違った。

(うつわ……)

金髪碧眼、華奢な雰囲気の、どびつきりの美少女だ。荒っぽいM  
eSより、どこかのお嬢様学校の方が、よほど似合つだらう。

「ちょっとあなた、やめなさい。今入つたら巻き込まれるわよ」  
ヒレニアが忠告したが、少女は気にしなかったようだ。無視して  
中へ入つていってしまう。

「ねえロア、もしかして新入生つて、あの子じゃないの？」

「そうかも」  
あれだけの美少女だ。在校生なら間違ひなく、噂になつてゐるだ  
ろう。

「 しうがないなあ。ちょっと助けに行つてくる」

「あたしも行くわ」

今出てきたばかりの食堂へ、一人して戻る。

(えーと、あの子は……いた!)

少女はほとんど騒ぎの中心部まで、入り込んでしまつてゐた。

「だめだよつ！ 下がつて……」  
だが美少女は動かない。  
かすかに呪が聞こえた。

「荒れ狂う魔の流れよ、いまひとたび静寂のつむじ、在るべき姿に  
戻れ……」

たしか効果が不安定なために使う者が少ない、無効化魔法だ。

「 カーム・フィルド！」

ほんのわずかな間、周囲の魔法がすべて無効化される。だが、それで十分だった。実体化したばかりの精霊が、出鼻をくじかれてふたたび霧散する。

（本校へ直接入学するのは、ダテじゃないってことか）

おとなしそうな見かけによらず、かなり場数を踏んでいるのは間違いない。だいいちそうでなければ、この状況でパニックも起こさずに召喚を阻止するのは無理だろう。

この無効化魔法、普通の魔法が対象なら間に合わない。気づいて唱えても、相手のほうが早く発動する。

が、精霊相手だと勝手が違う。実体化したあと改めて力を開放するため、上手くそのタイムラグを狙えば、強制的に非実体化させることが理論上は可能だ。

とはいって、術者同士にかなりの実力差がなければ簡単に力負けするし、タイミングも慣れていなければ狙えないシビアなものだ。

それを金髪の美少女は、やすやすとやってのけた。つまり一瞬で相手との実力差を見抜き、確実にやれると判断したことになる。

「あの子、いつたい何なのかしら？ どうみても普通じゃないわ」「ボクに言われても。本人に聞いてよ」

「それもそうね……」  
面倒見のいいエレーナが、美少女に声をかけた。

「あなた、大丈夫？」

「はい」

澄んだ泉を思わせる声だ。

「それならよかつたわ。

それあなた 新入生のルーフェイア＝グレイス？

「はい、そうです」

どうやら最初の予想は当たつたらしい。

「ロア、手間が省けたわね。

ルーフェイアは聞いてるのかしら？ 彼女 ロアがあなたと同室よ

「そう、なんですか？ えっと、先輩、よろしく……お願いします」

「……よろしく」

だが独り住まいに未練たらたらの彼女は、あまりいい顔をしない。

（ ロア！ ）

エレーナが、ロアの脇腹を肘で突付いた。

(え?)  
(ダメよー)  
(あつー)

少女の不安げな面持ち。これからどうなるのだろうと、半ばおびえているのが、その表情から読み取れた。

ふつと、昔母親を亡くした頃の自分が重なる。  
この学院には孤児が多い。もしかすると、彼女もそうなのだろうか?

「えつと……」めん、ちょっとと考え事してたかい。とつあえず部屋まで行こうか? 荷物、あるよね?」

「あ、はい」

やつと少女の顔から怯えが消える。

思わずほつとした。それほど落胆こんでいるわけではないようだ。

「そしたらロア、私は図書館寄つてくれ

「あ、そう? じゃあまた後でね」

食堂を出たところでヒレーナと分かれ、ロアは少女と一人になつた。

「うして見てみると、なおさらその美少女ぶりが際立つ。明日あたり 下手をすれば今日中か には、男子生徒の間でウワサになること請け合いだわ。 事実こうして歩いているだけで、すれ違う生徒のほとんどが振り返つてこくのだ。

( 世の中、絶対不公平だよね  
思わずひがみたくなる。 )

これだけの容姿に、この学院へ直接入学できるほどの能力と学力。およそ普通の人間が欲しがるものは、ぜんぶ持つていると言つてい。い。

だがルーフェイアのほうは、あまりそつ脱つていなにようだつた。 「あの……先輩、なんかみんな、じつち見るんですけど……？ あたしどこか……変ですか？」

「あのねえ」  
最初はいやみかと思つたのだが、どうやら本氣だ。

「キミが可愛いから、注目をあてるんだってば」「…………え？」

ロアの言葉を聞いて、少女はきょとんとした表情で、考え込んでしまつた。何を言われたのか、理解できないようだ。

「あきれた！ 言われたことないの？」  
「ない……です。強い、はよく、言われましたけど……？」  
思わず頭を抱えたくなる。

「この美少女、いつたいどうこう生活をしてきたのか、この手の常識は全く知らないようだ。  
とんでもない後輩を押し付けられた気がする。  
( まったくこの年で……って、あれ？ )  
そういえば、少女の年齢さえも知らなかつた。

「 あのや、キミ幾つ？」

「十歳、です……」

それにしては小柄だ。

だがロアは、そんなことを思つ暇がなかつた。

十歳。

妹が生きていれば、ちょうどこの歳だ。

げんきなもので、急に少女がいとおしくなる。

「そつか。それでひとりでここへ来たんじや、心細かつたね」「心細いっていうか……あたし、学校とか……初めてで……」「え、学校行つてなかつたんだ」

だとするとやはり、戦場育ちだらうか？ 少年兵として前線に出ていたなら、さつきの食堂での行動も納得がいく。

これだと学科でパスしたのが不思議だが、おそらくはもともと頭のいい子なのだろう。戦地で生き残るために何なりの知識が必要だし、インテリ崩れの兵士からいろいろ学んだ可能性もある。

何がが心の片隅に引っかかった気はしたが、ロアはそれ以上考えなかつた。

「そつか、それだと心配だね。でも大丈夫だよ、きっと。うん、大丈夫」

死んだ妹と同一年と知つて、すっかりお姉さんモードだ。先刻までの嫌がつていた様子はどこへやら、根拠のない自信で少女を励ましている。

「とこりでお皿は済んでる？ もしまだなら、荷物置いてから食べに行こりうか？」

「あ、えっと、あの、途中で……少し、食べたので……」

少女の方も、ロアのお姉さんぶりに安心したようだ。笑顔が多くなつてきていた。

「おっけーおっけー、そしたらまず荷物もらつて すみませーん！」

寮の入り口で寮監を呼び、少女の荷物を受け取る。

「つて……これだけ？」

「はい」

彼女宛てに送られてきていた荷物は、簡単に持ち上げられる大きさのケースがひとつ、それだけだつた。確かに孤児院などから学院へ来た場合、荷物が少ないのでほとんどだが、これはその中でも少ないと部類に入るだろう。

それなのにぜんぶ届いてよかつたと言わんばかりの少女の表情に、なぜかこちらが切なくなる。

（まあ、ボクも少なかつたけどさ……）

たつた独り戦場に残されたあと、運良く保護されてこじく来たロアは、ほとんど荷物らしいものはなかつた。

少女の両親や家族がどうしたのか聞いてみたかったが、それを踏みどまる。もし自分のような目に遭つてているのなら、聞くのは酷いというものだ。

わざと知らぬふり、明るい顔をして荷物を運び込む。

「これなら整理は簡単だから、手伝わなくてもいいね？ そのへんのキャビネットとか、空いてるのは勝手に使って大丈夫だから」「はい」

「よし、いい返事。じゃあ後は……施設の案内、かな？ 教材はまだだだろ？」「どうする、今から行こうか？」

荷物を整理しなくて済むぶん、時間が空いてしまっている。

「あ、はい。お願ひします」

少女は素直にうなずいた。こつなると見かけとあいまって、可愛さが倍増する。

いつしかロアは、ルーフェイアを自分の妹のよひに思い始めた。

「よし、じゃあ行こう」

少女を従えて部屋を出る。

「向かい側が男子寮は聞いた？」

ロアが問い合わせると、金髪の後輩はこつくりとうなずいた。

「夜とか、間違えちゃダメだよ。何されるか分かんないからね」

「あ、はい……」

まだそういうことはよく分かっていなそしが、いきおひ釘を刺す。これだけの美少女だ。何か起にいつからでは遅い。

そのまま並んで寮を出た。

「食堂は……分かるもんね。向かいは診療所。え？ 知ってるんだ？」

まだ行つたワケもないのことよく訊くと、こゝへ来てすぐひと騒動起こしたといつ。

「最速記録だらうなあ、それ」

「この学院だからけつこの荒事も多く、生徒や教官がケガをすることは確かにあるが、「入学のサイン直後に学院長に怪我をさせた」というのは、たゞがに言い伝えられていない。

「すみません……」

「あ、気にしない気にしない。銃口なんか向けた学院長が、悪いんだし」

「この場合はどうみても、自業自得だろう。

「それにしても学院長、銃なんて使ってんだ。あんな古臭い武器、ここにじやたいして役にたたないのに」

魔法を効率よく物に付与させる方法が見つかって以来、技術は日進月歩だ。武器も当然 　というより真っ先にその洗礼を受け、旧来の飛び道具はたちまち時代遅れになってしまった。

見かけは軽装でも、戦闘行為に携わるものはいまはみんな、魔法の防壁を身にまとっている。これを破つて相手に傷を負わせるには、魔力の込められた武器が必要だ。

だが手に持つて使うタイプの武器と違い、飛び道具は術者の手を離れるため、持っている魔力が弱い。そのため防壁を破れず、食べ止められるケースが多くつた。

この結果、武器の主力は再び、近接武器に戻つてきている。

「ルーフェイアも、銃なんて無視しちゃって良かつたのに  
でも、もし新型弾だったら、困りますから……」

そういうばそんな話は、ロアも最近聞いていた。なんでも弾丸に  
新型の魔力石を使うことで、今までの数倍の魔力を持たせることが  
できるらしい。まだテスト段階だが、もしこれが実用化されれば、  
戦法がまた大きく変わるような代物だ。

ルーフェイアはその点も考慮して、身の安全のために叩き落した  
のだろう。学院長もイタズラのつもりが、ずいぶん高くついたもの  
だ。

続いて並びの、大きな建物の前へ来る。

「あつちが講堂で、じつちが図書館。  
図書館さ、けつこう本多いんだよ。でもテスト前とかけつけいつ混  
むから、早めに借りないとダメ」  
そんなことを言いながら歩き回り、最後に尖塔のひとつへ上がっ  
た。

「ここは西塔。

えーっと、見えるかな？ 校舎の裏庭が校庭兼ねてて、普段の訓  
練はそこでやるんだよ」

下を見せながら説明する。

「あの、あつちの塀は……？」

少女が校庭の奥の、がつちりした高い塀を指差した。

「ん？ ああ、あれはホントの訓練所」

「……」

なぜかやけに嬉しそうだ。

「あのねえ、訓練つて言つてもホンモノの魔獣、放つてあるんだから。そんな浮かれてると、エライ目に遭つよ」

「え、でも、魔獣だけ……なんですよね？」

それならどうという事はない、そんな表情だ。

（うーん、なんか自信過剰みたいだけど……でもたしかに、食堂でのこともあるしなあ。

どっちにしてもいっぺん、連れてつたほうがいいかな？）

もし一人で入り込んで、なにかあつては大変だ。

「そんなに言つなら、行つてみる？」

「はい」

答えながらルーフェイアは、ずっと持つていた包みをほざいた。中から出でたのは、一振りの見事な太刀。

「まさかそれ、キミの得物？」

「はい。両親が、これ……持つてけつて」

（……あれ？ この子つて孤児じやなかつたんだ）

少女の言葉に、ロアは自分が完全に勘違いしていたことに気づく。

だがよく考えてみれば、ルーフェイアは一言も、そんなことを言つていない。こつちが思いこんでいただけだ。

もちろん少女のほうはロアのそんな思いを知るはずもなく、慣れた調子で太刀を腰に下げている。

見かけに比べて重量があるはずだが、よろめきもしない。かなり使いなれていようだ。

こまひとつ狐につままれたような気がしながらも、ロアは少女と

共に訓練所まで来た。

弱いとは言え魔獸が野放しになつてゐるここは、ルーフュニアたち低学年は原則出入り禁止だ。それどころかその上の中学年でも、それなりの資格を何か取らなければ、一人での出入りは認められない。

当然低学年連れのロアは入り口で呼び止められたが、理由を話すと許可が出た。

ここへ入学した低学年が、興味本位で訓練所に入り込むのを防ぐため、あえて最初に怖い思いをさせる。これ自体は、よく行われているのだ。

ゲートの隣の、詰め所のドアが開けられた。普段の出入りは、この詰め所を通らないといけない。万一の事態に備えてのものだ。

「いい？ この奥だからね」

殺風景な詰め所を抜け、反対側のドアの前で立ち止まる。ここから奥は弱肉強食、弱いとは言え魔獸の世界だ。

外の気配を探る。不意打ちだけは食らいたくない。

「あの、先輩、平氣です……よ?」

だがルーフェイアは、無造作と言つていいほどの調子でドアを開け、中へ入つていつてしまつた。

まったく緊張感がない。

「ちょ、ちょっと待ちなよ!」「

慌てて後を追う。もし彼女に何があれば、ロアも減点されるのだ。

「魔獸つて……でもあんまり、強そうな気配……ないですね」

「後ろつ!」

のんびりしているルーフェイアに、ここに放し飼いにしてある植物型の魔獸 足と歯が生えた雑草風味 の触手が迫つている。だが彼女は、悠然と首をめぐらしだけだった。

凄惨な笑みが、その顔に浮かぶ。

「 フレイム・ロンド!」

火炎系の下級呪文だ。花びらのように炎が舞い散り、魔獸が慌てて触手を引っ込んだ。

「 破つ!」

さらにルーフェイアの裂帛の気合。ばらばらと触手が切り落とされる。

“あいいいいい”

魔獸が耳障りな声を上げるが、少女は意に介さない。

さつ、と音を立てて踏みこむと太刀を振りかぶり、躊躇うことな

く突っ込む。

( 速い! )

そのまま全体重を乗せて、彼女は刃を振り下ろした。

一刀両断。

魔獣が叫びをあげる間もなく一いつに分かたれ、さらに切り刻まれて絶命する。

( なつ、なにこの子…… )

十歳の少女がまるで傭兵隊並み　いや、それ以上だ。

「先輩、こここの魔獣つて……これだけ、ですか？」

度肝を抜かれたロアに対し、少女のほうは平然としている。

「え？　あー他にも何種類かいるけど、だいたいコイツと同じようかな？　なんでか小竜族が少しいるけど、あれはさすがにヤバいし」「……」

すてきなオモチャをつけた、そんなルーフェイアの表情に、背筋を冷たいものが走る。ここで止めなければぜつたい、喜んで退治に行くはずだ。

「と、ともかく訓練はまた今度！　まだいろいろあるんだし」名残惜しげなルーフェイアを、強引に引っ張つていく。これで見かけは華奢な美少女なのだから、始末に追えない。

( いつたい、どういうコなんだか？ )

食堂の呑喰騒ぎのときもそうだったが、やはり並みの少女ではなれそうだ。

かといつて訊くのもためらわれ、腑に落ちないままロアは、最初に出会った食堂まで戻ってきた。

「せっかくだから、なんか食べよ。中途半端だけば、おやつならちよつといいしさ」

後輩を連れて中に入る。

もう昼下がりといった時間だが、小腹が空いて軽く食べようつとこうのだろう、食堂は意外と混んでいた。

「ルーフェイアは何食べる？」

「え？ えっと、ええと……」

あの戦闘時の切れ味はどこへやら、少女はその場で考え込む。自分のを決めながら、ロアはのんびりと待った。概してこういつものは、時間がかかるものだ。

だが。

「ルーフェイア、あのさ、キミこれが何か分かってる？」

「食べ物……ですよね？」

何か様子が違うと問いかけたロアに、案の定というべきか、激しくの外れな答えが返ってきた。

「食堂で食べられないもの、置くわけないじゃん……。まあ、これとかどうかな？」

「これ……ケーキ、ですよね？ 何でこんなに、種類……あるんでしょ？」「

何かもう、次元そのものが間違つてこらへるらしい。

「まさかさ、食べたことないの？」

「えっと、あります。田このとか……あと、黒いのも、その場で貧血を起しきずには済んでよかったです、そうロアは心底思つた。

シエラ学院はワケありの生徒が多く、稀に少年兵上がりまでいるため、たしかに一般常識からズレている者はいる。このだが……。

「（）まで本氣で何も知らないって、初めて見たなあ

「すみません……」

視線を落として謝る姿は可愛いが、この子の知識や能力は、問題になるレベルで偏つているようだった。

「とりあえず、ボクが選ぶよ。えーっと、あんまり甘くないほうがいい？ じゃあこれかな」

放つておいたら口が暮れるまで迷つてこそうで、適当に選んでやる。

「ほひ、（）席空いてるから、座つて座つて。ボクがこれ持つから

任せるのは不安すぎる、ロアはトレイを自分で持ち、少女を先に

行かせた。ちよこさん、と座った田の前に、ケーキと飲み物とを置いてやる。

「きれい……」

フルーツ類が宝石のように飾り付けられているのを見て、ルーフェイアがうつとつと顎ひ。

「本土からちゃんと、本職来てるからね」

もうだいぶくたびれたお爺ちゃんなのだが、腕は確かだ。ケンディクの店は子供に譲つて、自分は孤児を喜ばせてやつと、ボランティア同然でここに勤めてくれている。

ひと口食べると、少女の顔がほころんだ。

「……おいしく」

「あはは、お爺ちゃん聞いたら喜ぶよ」

食べて喜ぶ姿がいちばんのお礼、それがお爺ちゃんの口癖だ。おいしそうに食べるルーフェイアを見ながら、ロアもお気に入りを口に運んだ。

「そいえばたしか、クラス分けのテストとか、あつたと想つんだけじゃ。どだつた？」

食べながら、思い出して訊ねる。

この学院は毎年春になると、前年の成績でクラスが分けなおされる。そして新入生はあらかじめ、分校で編成用の試験を受けてくるはずだ。

いまは春ではないが、試験が免除になるとは思えなかつた。

「えつと、本校入学の試験は、受けました。

あと学院長が、クラス分けの試験……たしか、あとでつて……」

「つづわ、それヒドつ。一回やつてんだから、それ使えばいいのに」

テストなんていうオソロシイものを何度も受けるなど、考えるだ

けでも気が滅入る。

「なんか、時期が半端で、分校のテストじゃダメって……」

「あー、そゆことか」

時期も時期なうえ、分校を飛び越えての特例入学だからだらう。万が一レベルの違いすぎるクラスに入つたりしたら当人とクラスメイトの双方が不幸だ。

そのために万全を期しての再テストなのだろうが、やはつ氣の毒だった。

「んじゅせ、教えてあげよつか？ 少しでもやつとけば、なんか違うかもだし」

「いいん……ですか？」

「もちろん！」

ロアとて自学年のAクラスだ。四つも年下の勉強をみるくらいなら、どうとこつことはない。

「このあとどうせ時間あるから、部屋帰つたらおしゃべりでもしよう

「はい」

「よし決まり、んじゅまずは腹ごしらえ！」

よく分からなことじつけをして、ロアはケーキのおかわりをしご立ち上がった。

学院の夜は静かだ。

特に消灯時間を過ぎると各施設が閉鎖されるため、廊下を歩く足音でさえかなり響いてしまう。

だがロアは、例によつてまだ起きていた。

消灯時間といつても、室内までは管理されていない。テストの前などは、徹夜組も多いのだ。

ルーフェイアの寝室のドアが閉まつているのを確認し、共用スペースの明かりを点け、そつと端末の前に座つた。

魔法の遠見水晶から発達した魔視鏡と、通話石を利用した通信技術。魔法を込める魔石から作り出された、さまざまなものと記録できる記録石。魔法をコントロールする補助具として、もつともボピュラーナ杖。

どれも単体では昔から使われてきたものだが、それらを組み合わせる技術が生み出されたとき、状況は一変した。

記録石と魔視鏡が組み合わされ、誰でも簡単に記録を再生出来るよつになつた。

次に魔視鏡と通信石が組み合わされ、映像配信が実現した。

さらに高位通話石が発明され、独立していった多数の通話石を束ね、大規模な通信網ができた。

加えて記録石に映像や音声だけではなく、「さまざまな動作」も記録されるよつになつた。

それをコントロールするために、簡単に発動できるよう設定された専用の小さな魔法の杖が作られ、細かい指示が可能な操作盤へと進化した。

そうして出来上がったものは……通話石の設定さえ出来れば世界中どことでもつながり、接続している端末の記録を閲覧できる、誰も予想しなかつたような道具だ。

もちろん完全になんでも閲覧できるわけではなく、ある程度の制限はされている。だがそれを差し引いても公開されている情報は膨大だし、何より今まで知り合つことのなかつた相手と、直接話せるのだ。

海と魔獸によって分断されていた世界は、いま草の根レベルで急速に距離を縮めている。

物理的政治的には隔絶されながら、互いに近づく世界。これが何を生むのか、誰にも分からぬ状況だ。

もつともロアにしてみれば、そんなことはどうでも良かつた。自分にとって極めて有用な道具、それだけのことだ。

眠っている後輩に気づかれないよう、細心の注意を払つて端末を立ち上げる。昨日までは独りだったのだけつこうおおっぴらにやつていたが、これからはそうもいかないだらう。

まず今までいちいち入力していたものを、一拳動で切り替わり、通信網から安全に離れるよう細工した。

さらに通常モードからの切り替えを、今まで以上に複雑な手順にし、本人確認のステップも付ける。こうしておけば万が一ルーフェイアがこの端末を触つても、なにも起こらないはずだ。

そして、アクセスを開始する。

通信網に忍び込み、情報を喰らうモノ。

それがロアの夜の顔だった。



もつとも彼女は、記録の破壊や改竄はしない。その必要はなかつた。

(今日こそ……)

見つけてやる、そう思いながら操作盤を叩く。

彼女にはずっと探し続けているモノがあつた。だがもともとのネタが「存在はするが詳細は一切不明」という物のため、どこをどう探しても見つからない。

普通の手順で当たれる記録は片っ端から調べ、それでも見つからず、ついにロアは不正アクセスに手を出したのだ。

だがそれでも、手にした情報は断片的なものばかりだった。

(つたぐ、四年もやつて見つからないとか、ハンパじゃないよね)  
そう思いながら手元の写真を見る。

自分と、妹と、父と、母。

家族で撮った最後の写真だ。

あの戦場と化した街から逃げる直前、母が焼き増しして防水加工しておいたものをロアに持たせたため、手元に残った。

これと、妹が忘れかけたのを持って出た、魔石のはまつたお守り。たつたこれだけが、ロアに残された家族の思い出だ。

(きっと……見つけるから)

父は写真を撮った直後に紛争へ駆り出されて戦死、その1ヶ月後には母と妹も死んでいる。

だがよほど強運だったのか それとも運がなかつたのか と

もかくロアは独り生き残り、戦場をさまよつてこるといひを由國の兵士に保護され、巡り巡つてシエリ学院へ送られた。

それからずつと探している。

自分から家族を奪つたものを。

保護されたその晩、やつとあつたベッドの中で、ロアは兵士たちの会話を聞いた。

「ひでえよな。あんな小さな子がひとりで戦場をまよつてたんだぜ？」

「ああ。よく生き残つたもんだよ、可哀相に」「ウワサじや、シユマーの連中が向ひに付いたらしこ」「マジかよ。あいつらがそんなことをや、こんな泥沼にならぬいうちに終つたのによ」

「ホントホント、そうすりやあの子だつて、あんな目に遭わずにすんだよな」

そうしてロアは、復讐の対象を知つたのだ。

その後学院へ来てからば、「シユマー」に関するありとあらゆる情報を集めた。

だが禁じ手の不正行為にまで手を出したところに、分かったのは「そういう傭兵一族がいる」とことじことと、「その一家の子弟が戦場で育てられる」とことじことだけだ。

どこの誰がそうなのかも、いったい今どきいるのかも、全くわからぬ。

（でも必ず、見つけてやる）

復讐するため。自分の家族を奪つた償いをさせたため。元鬼気迫る表情で、ロアはキーを叩き続ける。



Ruffer

「そこまで」

鋭い声で、はっと我に返った。

「出来たかね？」

「あ、はい」

慌てて答案用紙を渡すと、教官の顔色が一瞬変わる。朝から連続で試験を受けて、疲れて半分うとうとしていたのが、いけなかつたのかも知れない。

ぜんぶ答えは書いたから、だいじょうぶのはずだけど……。

「きみはたしか……五学年だつたね」

「えつと、そう、聞きました」

本当のことを見つと、自分でもよく分からぬ。ただ先輩や学院長が、やつ言つてたはずだ。

「うーん、五学年ねえ。それならなんで、この解法を知つているんだ？ そもそも今まで正規教育を受けていないのに、これだけどうのはう……」

教官、何かぶつぶつ言つてゐる。

「あの……？」

どうしていいか分からなくて、おそれおそれ声をかけてみた。

「ん？ ああ、今日はこれで終わりだから、部屋へ戻つてかまわんよ」

「はい」

荷物を持って立ち上がる。

「明日は実技だから、指定の時間に指定場所へ来なさい。遅れないよ！」

「はい」「たづね

立ち上がりつて身体を伸ばす。座りっぱなしなんて初めてで、身体じゅうが重い感じだ。学院に来る前の分校でもテストを受けたけど、何日かに分けて少しづつだったから、こんなことはなかった。

本来は何のためなのかよく分からぬ、小さな部屋を出る。

「どうだった？」

外でロア先輩が、待つてくれてた。

「えつと……身体、痛いです……」

「そう来るかー！」

あたしの言葉に、先輩が笑い出す。何がそんなにおかしかったのか、お腹を抱えての爆笑だ。

「先輩……？」

「あー、ゴメン、ゴメン。えつとか、身体じゃなくて、試験じゃんとできた？ 難しくなかつた？」

そういう意味だったのかと、やつと理解する。

「いちおつ……ぜんぶ答え、書きました。でも思つたより、難しくなかつた……かな」

「やっぱそうかあ」

思つたとおり、そんな表情でロア先輩がうそうそとうなずく。

「教えててびつくりしたもん、頭よくて」

「そう、なんですか？」

あたしことも、母さんたちに笑われたのに。

「そそ、自信持つちやつてダイジョブダイジョブ。でも、なんか食べる？ 疲れたでしょ」

言いながら先輩、あたしを食堂のほうへ引っ張つてくる。答えがNOってケースは、考えてないみたいだ。

もしかするとあたしはただの口実で、何か食べるのが目的なのかも知れない。先輩は昨日もケーキをおわりしてたし、そのあとの夕食もちゃんと食べていた。だからきっと先輩、食べるのが好きなんだろう。

昨日と同じようにケーキを選んでもらって、空いている席に座ると、向こうのほうにイメージがいるのに気がついた。いつしょに居るのは友だちだらう。

向こうも気がついたみたいで、視線が合つ。ちよつと嬉しくなつて、小さく手を振つた。

とたんにイメージが、両脇の友だちから殴られる。

あたしの、せい？

ほかに考えられなかつた。あたしみたいな、普通の生活を知らないような人間が、親しげにしたりするから……。

涙がこぼれそうになつて、下を向いてくちびるを噛む。

「わわわ、ルーフェイアどしたの？ どうか痛くした？」

先輩が慌ててるのを見て、泣くのをやめようとしたり、逆効果だつた。よけいに涙があふれて、止まらなくなる。

イメージに会つてからあたし、どうもダメだ。前からすぐ泣いて、どうにかしなきゃと思つてたけど、なんだかひどくなつた気がする。

「ほんとにキミ平氣？ 部屋帰つて休む？」

「あー先輩、マイシ泣き出すと当分ダメですか？」

聞き覚えのある声に、思わず顔を上げる。

「イメージ……？」

「つしょにいた二人の首根つこをつかんだ彼が、目に前に居た。」  
「ともあらうに二人を引きずりながら、ここまで来たらしい。

「オイコラ何しやがる、放せつてのー。」

「つかイメージ、こつもとキャラ変わつてるつてー。」

友だちらしい一人が、口々に文句を言つ。

なんだかよく分からぬいけど、やつぱりあたしが原因で、騒ぎになつてるみたいだ。

「あの、あたしのせい……ごめんね……」

申し訳なくて、引きずられてきた一人に謝る。

「あ、違うからー。そのさ、悪いの俺らだからー。」

友だちの片方が、あたしに向かつて謝つた。

「てかおまえなあ、なんだつていきなり泣くんだつての

「ごめん……」

「こんどはイマドに謝つたあたしの前で、なぜか彼の頭が、『ちんと音を立てて殴られる。

「キミねえ、何しにここまで来たか知らないけど、この子泣かせたらボクが承知しないよー！」

ロア先輩、すごい剣幕だ。

「あの、先輩、違うんです！」

殺氣のようなを感じて、慌てて止める。

「けどせ、こいつらが何かしたから、ルーフェイアが泣いたんだよつまりはあたしのせいだ、よけいにややこしくなつたらしい。

「あの、イマドたち、関係なくて……その、すみません……」

上手く説明できなくて、だんだん声が小さくなつてしまつて、情けなくてまた涙がこぼれた。

「あ、先輩も泣かした」

「ちょっと、ボクは別に！」

何がなんだか分からなくなつてくる。

どうしていいか分からず、それでも泣くのだけはやめないと必死に涙をぬぐつていると、イマドが苦笑しながら話しだした。

「先輩、ここに来る前、けつこーりのヤバかったんですよ。んでその反動で、すぐ泣いちまつて」

「ありや、そうだったんだ」

この程度の説明なのに、意外なくらいにあつたと先輩が納得する。

「学院来てほつとして、そうなる子けつこうるもんね。

ルーフュイアも大変だったねえ、でもこにならもつ、だいじょ

ぶだからさ

言いながら先輩、あたしの頭を小さく子みたいに、がしがしと撫でた。

「まあ『イツの場合、最初からそうとう泣き虫ですかね』

「イマド、ひどい……」

何もそんなこと、ここで大きな声で言わなくたっていいの。先輩なんてそれ聞いて、また笑い転げてる。

「俺が、ヴィオレイ。名前なんての？ もうクラス決まつたんだ？」

「おい、なに抜け駆けしてんだ！」

「ひつちはこつちでお構いなしだ。

でも……なんだかちょっと、楽しい。

「ほりキミたち、ルーフュイアおどかさない。あとこの子のクラス、まだ決まってないよ。いまクラス分けのテスト、受けてるところだから

「Aクラスだと思つたがね」  
なぜか自信たっぷりに、ロア先輩が言つ。

「そうそう、それでこれから、この子連れて訓練でもしようかと思つてたんだよね。だから、キミたちも来なさい」

「え、マジっすか？」

さすがにこれにはびっくりしたみたいで、イマドたち三人が目をぱちくりさせる。

「大マジだよ。てかね、キミたちだつてこの子、同じクラスのほうがいいんでしょ？ なら、協力してあたりまえだし」

反対意見はすべて却下、そんな威圧感で先輩が言い放つた。

「おれ、欲しい限定販売あつたのに……今日発売なんだぜ……」

「そこ黙る！」

見ているだけで楽しいやつと。いつの間にか泣くのをやめて、笑っている自分に気づく。

あたしが夢見ていた世界が、いま目の前にあつた。

その晩、あたしはベッドの中で寝返りばかりしていた。  
学院の夜は、とても静かだ。

これはなんの音もしない。銃撃の音も、砲撃の音もしない。

静かすぎて眠れなかつた。

これが、平和なのかな？

こんな穏やかさ、とても信じられない。

逆に言えばそれだけ、常に気を張っていたんだろう。でもそれは当たり前だつたし、何より生き残ることぜつたい必要なものだつた。

そつと起き上がる。

柔らかいベッド。清潔な部屋。どれもあたしにとっては、馴染みが少ないものばかりだ。

なんとなく不安になつて、枕元に置いておいた太刀を手にする。  
これだけは変わらなかつた。

柄を握つていると、いろんなことが脳裏をよぎる。  
炸裂する砲弾。えぐられていく大地。引き裂かれて死んでいく兵士たち……。

でもなぜだらう？

あの地獄の風景が、呼んでいるような気がする。

無念の死を遂げた亡靈たちが、囁いてる。

ここへ帰れ、と。

でももう、あたしはイヤだつた。ほんの少しでいいから、血の臭いから離れたかった。

それなのに亡靈たちは追いかけてきて、囁き続ける。

ここへ帰れ、と。

あたしは頭を振ると、立ちあがつた。

確かにいつかは帰るだろう。それが約束だから。

けど、今だけは……。

もう寝つけそうになくて、寝室のドアに手をかけた。共用スペー

スの端末を使えば、なにか適当に暇を潰せるだろう。

そして、気が付く。

こんな遅い時間なのに、共用スペースからかすかに物音がしてた。魔視鏡の共鳴音。それに、操作盤を叩く音。どいつも、先輩も起きてるらしく。

驚かさないようだと想つて、あたしはそっとドアを開けた。

先輩が端末に向かって、何かしてる。

なんだかすごく真剣な感じで声をかけられなくて、そのまま魔視鏡に映るものを、あたしは後ろから眺めていた。

なんだらう、これ。

ふだん田にする映像とか、じゃなくて、何か文字ばっかりだ。それが先輩が操作するたび、すごい勢いで流れしていく。

しばらく見てているうちに、やつと幾つか見知った単語があることに気がついた。これならたぶん……記録石の中のデータ一覧だ。

けど、自分のをこんなふうにして見るのは、聞いたことがなかつた。だいこちこんな変わったことをしなくても、簡単な操作で詳しく見られる。

だとしたら、何を？

しばらく考えて、あたしは思い当たつた。



## Loa side

その晩もロアは、いつもと同じように「それ」を探していた。次から次へと関係ありそうな場所へ侵入し、検索し、情報を漁る。万一何か引っかかるれば、それがたとえ噂話でも、詳細に探っていく。だがそのどれもがほんとうに「単なる噂話」で、憶測の域を出ないものだった。

（ダメなのかな……）

つい、気弱が頭をもたげる。

年単位で、しかもかなりの危険を冒して探しているのに、いまだに証拠の力ケラも見つからないのだ。

火のないところに煙は立たない。ならばこれだけまことしやかに囁かれているのだから、必ずあるはず。

そう思つて探し続けてきたが、もしかすると自分が追いかけているのは、実体のない都市伝説だったのかもしない。そんな気がしてくる。

だとしたらどうするか、そんなことを考えた瞬間。

「あの、先輩、それ……」

「……！」

不意に後ろから声をかけられて、ロアは死ぬほど驚いた。だがとつさに画面だけは切り替える。

うすうす感じてはいたが、それ以上に恐ろしい少女だったようだ。ドアを開ける音もなければ、近づいた気配もなかつた。

心底焦りながら振り返る。

見ればルーフェイア自身は、別にわざとではないらしい。どうい  
う育ちかたをしたのか、これが当たり前のようだ。

ただ少女の口から出たのは、それ以上に予想外の言葉だった。

「あ……もつと……」  
「え？」

意味が飲み込めずの一瞬考え込む。  
もつとと言つからには、何かをさらうと言つわけで、その「何か」  
が何かと言つと……。

自分でもよく分からぬ思考ルートを、それでも大急ぎで一周ほ  
どして、ロアは結論にたどり着いた。

「こいつの、好きなんだ？」  
さすがに怖いので、「何が」とは訊かない。  
「えっと、あの、不法アクセス……ですよね？」  
「うん」  
そこまで分かつてゐるなりと、ロアはあつたり認める。

「やつてたんだ？」  
「いえ、初めて、見ました……」

これは意外だった。

基本的にこいつのものは映像と違つて、見てすぐ分かるものでは  
ない。それなりの知識が要る。なのに初めて見てそれに思い当たる  
とは、けつこいつカンも鋭いようだ。

「それでよく分かつたなあ。あ、そいつ、これナイショにしとい  
てね」

ルーフェイアはそのあたりでほいほい喋るタイプではないが、い  
ちおう釘を刺す。

学院では諜報活動教育の一環で、この手の不正侵入や防衛も教えている。だが実際にやつていいのは、任務や授業の中だけだ。個人で勝手にやつてているのを見つかったら、もちろん怒られる。

ただ腕に覚えのある学院生ともなると、監視を簡単にかいぐぐつてしまい、いたちごつこだ。しかもそれが、ハイレベルな諜報員を生み出す要素のひとつにもなっているのだから、皮肉な話だった。

「さ、もう遅いし寝なくちゃね」

ロアは魔視鏡をオフにして立ち上がった。自分ひとりならともかく、こんな遅くまで、まだ小さい後輩を起こしておくわけにはいかない。

だがいつも素直な後輩が、珍しく不満そうだ。諦めきれないようすで、ロアの端末を見ている。

ロアは考える。『どちらにしても見つかってしまったのだ。』の子はこれからも、毎晩覗こうとするに違いない。  
ならばいつそきちんと時間を取つて教えてやって、終わつてこの子を部屋へ戻してから自分のことをするほうが、問題が少ないのでないだろうか？

「そしたらさ、教えてあげようか？」

「え？！あの、いいん……ですか？」

後輩の表情が、驚きと喜びへと変わる。

「うん、かまわないよ」

じゅうじの手のことは、授業を受けるようにしなればイヤでも覚えるのだ。それなら今から教えても、大差ないだろ。

「でも、ぜつたい他の人にはナイショだからね。部屋でやつてるとか、教官に知れたらヤバすぎだし」

「あ、はい」

何も知らない後輩を巻き込んだ気がして、少々うしろめたかったが、これで一安心だ。自分もやつているとなれば口外しないだろうし、「今日はじゅうじまで」と言えばじの子なら、素直にベッドに戻るだろう。

「じゃあ、明日から。今日はもつ寝ないと

「はい」

ドアを開けてやつて、少女を部屋へ戻す。だがそのうしろ姿が、妙に寂しそうだ。

「どしたの？　だいじょぶ？」

声をかけてやると、小さく首を振った。

「しょうがないなあ」

本人はだいじょうぶと言いたかつたらしいが、本当は心細いのが見え見えだ。

来たばかりで緊張していた間は感じなかつたのだろうが、時間が経つて少し慣れてきたから、環境の変化が身に染みてきたのだろう。ならいくらでも、と思つ。

「じゅうちおいで、いつしょに寝よ。毛布持つてきてね」

ぱつとルーフェイアの表情が輝いた。これはかなりの甘えん坊だ。ロアにしてみても、見かけがせいぜい六、七歳のこの子は、幼い妹も当然だ。よく懷いていふこともあつて、このへういで安心する

「ちょっと狭いけど、ガマンだよ」

ベッドの片隅に収まつた少女に、持つてきた毛布をかけてやる。

「もしかしてさびしくて、寝られなかつたんだ?」

「いえ、すごく、静かすぎて……」

人のベッドにもぐりこんでおいで、いいえも何もないのだが、ロアはそこは流してやつた。きつと認めるのが恥ずかしいのだろう。

「静かすぎて、寝られなかつたつてこと?」

じくりとルーフェイアがうなずく。隣で小さく丸まるようすが、ともかく可愛い。

それにして、うるさくて寝られないということのはよべ聞べが、静かすぎてといふのは初耳だつた。

「……今まで、工事現場でも寝てたわけ?」

思わず妙な突つ込みをしてしまう。

それが面白かったのか、少女は少し笑つて答えた。

「えつと、よく砲声とか、聞こえたり……あと、非常召集とか、あつたので……」

「寝る環境じゃないじゃんソレ」

どうやらやはり、少年兵あがりらしい。

何かが一瞬引っかかったが、安心しきつたルーフェイアの表情を見た瞬間、どうでもよくなってしまった。

「まあいいや、ゆっくり寝るんだよ」

「……はい」

遅いせいか、たちまち寝入ってしまった少女を見ながら、ロアも目を閉じた。

Ruffer

「あー食った食った」

「ルーチャンゴ馳走あまー」

「あ、こり、てめえら後片付けしりつー つか、作ったの俺だつー」

「さやかな声が響く。いまようど、みんなで夕食を食べ終わつたところだ。

クラス分けのテストが終わつたのはだいぶ前だけど、休みがあと一日の今晩になつて、ようやくあたしのクラスが決まった。

聞いた話じゃ、ずいぶんモメたりじい。飛び級がどうとか、教官が言つてた。

でも飛び級つて、なんだろう?

飛ばされて違うところへ行くのはイヤだから、イマドと同じクラスがいいと、言つたのだけだ。

「あ、ちよつとキヨミ、何やつてんのー そのケーキはルーフェイアのなんだから

「えー、持つてつちやダメっすか?」

「ダメっ!」

飛び級がイヤならと、あたしはAクラスになつた。思つてたより、いい加減な決め方だ。

けど話を聞いたロア先輩はとても喜んでくれて、しかもなぜか「お祝いをする」つてことになつて、それをしてたことだ。

この学院、クラス分けが決まるとお祝いする習慣があるらしい。

「ルーフェイア、このケーキにしてしまつよ」

「あ、はい」

最初は部屋で先輩と一人の予定だったのだけど、気がついたら人数が増えてた。エレーナ先輩が来て、イマドも来て、その友だちもついてきて、ご飯が足りないからってイマドが作ってくれて、先輩も買出しに行つて……。

こういうのが「学校」なのかな、と思う。なんでお祝いになつたかは今も分からぬけど、みんなで集まつて騒いで食べたりは、けつこう楽しい。

「ほらキミたち、そろそろ出でつてくれないかな。ボクが怒られるから」

「へいへい」

「ルーチャン、またねー」

「ロア、私も戻るわね」

急に静かになつた。

「大騒ぎだつたねー。おいしかつたけど

「はい」

最後に残つたものを一人で片付けて、やつとぜんぶ終わる。さつきまでの陽気さがいっしょに消えた気がして、ちよつと寂しかつた。

「さ、今度はいつものやううか?」

「……はい!」

急いで自分の魔視鏡の前に行つて、準備をする。毎日少しづつ教わるこれは、とても楽しみだつた。

「あー、もしかしなくとも、明日で休み終わりだつけね。そつするとゆづくじやれるの、今晚くらいかな?」

「ですね……」

きりんと授業が始まつたら、そつそつ夜更かしができない。遅刻したら減点されてしまつ。

「そしたらせ、今日はホントにやつてみる? ルーフュニアももつ、校内なら少しできると思つんだ」

「え、でも……」

本当のことを見つけてみたいけど、怖かった。なにしりやつてているのは、見つかったらタダじゃないものだ。だから失敗できない。

でもあたしの腕じゃ、何かヘマをする可能性が高かつた。

「あはは、ルーフェイアは慎重だねえ」

ロア先輩が明るく笑う。

「だいじょぶ、ボクが後ろついて、フォローするからさ

「あ、それなら……」

気持ちを落ち着けて、教わったとおり始める。

まず全体の構造を見て、どこが動いてるかをチヨックして……。

「そうそう、そこ気をつけて。ほり、足跡残してるよ」

「え？ あー……」

通信網上に残る痕跡を消しながら、ひとつひとつ教わったとおりやつていく。

あれ？

気になるものを見つけて、もつ一度画面を確認したけど、間違いなかつた。

「あの、先輩、これ……」

「学院長の魔視鏡だね。この間に動いてるなんて、珍しいや

先輩が言つには学院長、こういつた新しい道具は苦手らしい。だから仕事をしている毎回はともかく、夜になると早々に止めてしまうんだそうだ。

「止め忘れかな？ 見てみよっか

「あ、はい……」

ちょっとだけ気が咎めながらも、石の中の記録を覗いてみる。

「ガツ」の資料ばつかだなあ。たいした物ないね」

なんだかほつとする。やつぱり「この辺には、あたしは向いてないのかもしれない。

「学院長も大変だね、こんなくだらない」とまで訊かれるんだ。こんど会つたら、親切にしどこつか」「ですね……」

本当に細かい雑務から院の方針、果ては学院生が起こした不祥事の後始末まで、ありとあらゆることが山盛りだ。

「どうする？ も少しやる？」

「え？ あ、いえ、今日はもう……」

なんだか疲れてしまつて、これ以上続けられそうになかった。前線にいるほうがまだ楽だ。

「そだね、こいつの最初、すつごい疲れるし。

あ、最後にこれだけ見てこつか

あたしの代わりに先輩が操作して、記録の一覧が現れる。

「これ……伝言書？」

「そそ。でもこっちも、たいしたもんないね」

言いながら先輩が、一つの伝言に目を留める。

「これ、ルーフェイアのことだよね」

「え？」

驚いて表題を見ると、たしかにあたしの転入に関するところらしい。

「なんだろ？」

興味津々と いう表情で、先輩が中身を開く。  
イヤな予感がした。

## Loa side

ルーフェイアが緊張した表情で、ひとつひとつ操作をこなしていくのを、ロアは隣で眺めていた。

まだたどたどしい部分もあるが、初めて間もないことを考えると、上出来と言つていいだろう。むしろこの短期間で、よくここまで覚えたと感心する。

「もうもう、そこ気をつけて。ほり、足跡残してよ

「え？ あ！」

言われて慌てる後輩が、可愛い。

だがあるといひで、その動きが止まった。

「あの、先輩、これ……」

どうしよう、という表情で訊いてくる。

「学院長の魔視鏡だね。この時間に動いてるなんて、珍しいや」  
学院長は年せいが、この手のものはあまり使わない。だから、夜になつてまで動いているのは、稀だつた。

「止め忘れかな？ 見てみよっか」

「あ、はい……」

ルーフェイアがちょっとためらつてから、開く。

そのよつすに、この子はこういうことに向いていないのかかもしれない、とロアは思った。なにしろ素直でおとなしい性格だ。攻撃的なことにまづうしても、しり込みしてしまうのだろう。

だがそこつたことせ、取り返しのつかない事態を招くことがあ  
る。

何か考えてやつたほうがいいかもしない、そんなことを思いながら、ロアはざつと記録の一覧を斜め読みした。

「ガツコの資料ばつかだな。たいした物ないね」

もう少し何かあるのではと期待していたが、みじとなくらいに期待はずれだ。

「学院長も大変だね、こんなくだらない」とまで訊かれるんだ。こんど会つたら、親切にしどこつか

「ですね……」

どうでもよさげな雑務から院の方針、そうかと思えば学院生が起こした不祥事の後始末まで、まさしく何でもありだ。どうせここしても収穫なしと判断して、ロアは手を止めた。

「どうする？ も少しやる？」

「え？ あ、いえ、今日はもつ……」

ルーフェイアのほうも初めての経験で、そつとう神経をすり減らしたようだ。そろそろ潮時だらう。

「そだね、こいつの最初、すつごい疲れるし。

あ、最後にこれだけ見てこつか

何の気なしに、見つけた一覧を開く。学院長が外部とやり取りした、記録の一覧だ。

こいつらものは機密情報は期待できないが、ちよつと笑えるようなものがよく混じっている。

「これ……伝言書？」

「そそ。でもこっちも、たいしたもんないね」

予想に反して、事務的な連絡ばかりだ。私的なやり取りは、ここではやらないようだつた。

だが。

とある行で、ロアは予想もしなかったものを見つける。  
「これ、ルーフェイアのことだよね」「え？」

表題は「本校特別入学の件について」。日付などと合わせて考えると、ほぼルーフェイアのことに関するものではないだらう。

「なんだろ~」

興味津々、面白半分で記録を覗く。

中身は思ったとおり、ルーフェイアに関するものだつた。だがこの学院内や分校ではなく、誰か学外の人間 おそらくルーフェイアの両親 に宛てたものらしい。  
さすがにこれはまずいと、ロアは記録を閉じかける。  
が、その瞬間に入った文字に、釘付けになつた。

隣にいる少女の、フルネーム。ロアには名乗らなかつた、本当の姓。

ルーフェイア＝グレイス＝シュマー。

今までどれほど探しても見つからなかつた、敵の名。

「なるほどね。キミがシユマーの娘だつたんだ」

ロアが立ちあがつた。

「そう言えばこの間、『よく砲声が聞こえるところにいた』って言つてたもんね。他にもいろいろ。

ボクもバカだな。なんで気づかなかつたんだろう?」

思い返せば、何度もそれらしいものは、あつたのだ。

言動のあちこちで、少年兵あがりなことを匂わせていた。事実、桁外れの戦闘力だった。何より、両親が健在ながら前線へと出る子供。ふつうならあり得ない話だ。

それなのに疑わなかつたのは……外見と性格とに騙されたからだ。小柄で、折れそうに華奢な美少女。おとなしく、すぐ泣き出す性格。かのシユマーの人間というなら、もつと猛々しいものだと思い込んでいた。

いざれにせよ、敵は見つけた。ロアの瞳に危険な光が宿る。

何かを感じ取つたのだろう、少女がうろたえながらも身構える。

「あの……？」  
「死ねつ！」

問答無用とばかりに、ロアが手近にあつたペーパーナイフを投げつける。

たかがペーパーナイフとは言え、これは金属製でしかもそれなりの重量だ。投げ方によつては十分凶器になる。

正確に少女の眉間へと向かつて、至近距離からナイフが飛ぶ。

だがルーフェイアのほうも、それで決めさせたりはしなかつた。放たれた凶器を戸惑つた表情をしながらも、一瞬のうちに腕をかざして防ぐ。

にぶい音がしてナイフが少女の腕に突き立つた。細いとはいえ鍛えられた筋肉と骨とは、その程度では砕けない。が、それでも一瞬の隙が生まれる。

逃さずロアは間合いを詰めた。同時に強烈な蹴りを繰り出す。それをルーフェイアは、ふわりと身体を入れ替えただけで避けてみせた。

( さすがに、シユマーの人間なだけあるかな )

生半可な攻撃では仕留められそうにない。

「先輩？」

可愛らじい顔に困惑を浮かべながら、少女が問う。まさか彼女も、いきなり攻撃されるとは思っていなかつたようだ。

「可愛い顔して、とんだ魔物だよね！」

キミたちのおかげで、ボクの家族は全員死んだんだ！――

「え……」

ルーフェイアの動きが止まつた。

すかさずロアが跳びかかる。

そのまま組み敷いて、細い首に手をかけた。

悲しげな表情。

だが構わず、ロアは少女の首を締め上げる。妹と同一年の少女。

「これでひとつ、貸しを返してもいいつー――」

Ruffer

あたしたち シュマーのせいで家族が全員死んだ、そう、先輩が叫んだ。

どう答えたらいのかわからなくて、一瞬動きが止まる。

その隙を、先輩は逃さなかつた。

たちまち組み敷かれる。

先輩の手が、あたしの首にかかつた。

「せんぱ…… どうして……」

思わずそう言つたけれど、先輩は聞いてなんかいない。そのまますごい力で締め上げてくる。

振りほどけとしたけれど、片腕がやられていでどうにもならなかつた。

息が詰まる。

母さんの言つたこと、正しかつた。

心配そつだつた、母さんの姿を思い出す。

シュマーはどこで恨みを買つているかわからない、別れ際にそつ言われた。

もちろんそれはあたしも承知している。うちは代々人殺しをしてきたのだから。

先輩の家族も、誰かシュマーの人間が絡んだ話で死んだんだろ？  
もちろんあたしじゃない。けど、外の人間から見たら同じことだ。

それにあたしの手だって、今でも十分血に染まつていてる。

結局、あたしがバカだったのだ。

亡靈たちの言つとおり、あたしの生きる場所はあの地獄しかない。  
それなのに、このこってきたのだから。

だいいちあたしあいなければ、シユマーの人間でも、死なずに済んだ者がかなりいる。

あたしあいなければ。

もう、抵抗する氣もなかつた。

Loa side

「これでひとつ、貸しを返してもいいつーー」

叫ぶロアの身体の下、すでにルーフェイアは声も出せない。  
さらに腕に力を込める。

骨を碎こうかという勢いで。  
が、その時。

お姉ちゃん、やめて！

(え?)

懐かしい声を聞いたと思つた。

同時に、プレスレットにして身に着けていた、妹の形見が光りだす。

そして唐突に、周囲の情景が変わつた。

音はなく、映像だけ。

(なにこれ……？！)

どうやら戦場のようだつた。だがロアが知る故郷の街ではない。

どこかもつと別の、森の中だ。

そこに、青年と少女がいた。

青年のほうに見覚えはない。だが、少女のほうは。  
(ルーフェイア?)  
間違いない。  
(なんなの?!)  
ロアが戸惑っているうちに、状況は変わっていく。

青年が何事か叫んで、ルーフェイアのほうへ走り寄った。少女もその声に振り向き、ぱっと身を伏せる。

高位の炎魔法が炸裂した。

青年がまともにそれを食らって、文字通り焼かれて倒れる。起き上がりかけたルーフェイアが泣きながら何か言い、それにかすかに青年が答えた。

（ちょっと待つてよ！　どうしてこんなもの、ボクが見なくちゃならないのさー！）

妹を、家族を見殺しにした連中なのだ。

だが。

（ボクと、同じ……？）

目の前で近しい人を傷つけられて涙する彼女は、立場は違つても自分と同じだった。

いや、同じではない。

あの時の自分はただ呆然としているだけでよかっただが、彼女の置かれた状況はもっと厳しかった。

唇をかんで立ちあがり、青年に背を向ける。

生き延びるために。

おそらくいま手当てをすれば、青年は命だけは助かるだろう。だがそうすればその隙に攻撃を受け、今度は二人とも死ぬことになる。だから、見捨てた。

声は聞こえない。なのにルーフェイアの、とても言葉では現せない心が響く。

魂を引き裂かれるかのような慟哭。

だがそれを、歯を食いしばって耐えている。

森を抜けるルーフェイアの目の前に、いくつかの人影が立ちはだかつた。

( うちの傭兵隊? )

見間違えようのない、あの制服。

そこへ少女は容赦なく突っ込む。

相手が子供なので油断していたのもあつたのだろう、瞬く間に二人が刃の餌食になつた。

さらに最後の一人を、たちまちのうちに切り伏せる。

嘆きながら。

己の運命を呪いながら。

それでも彼女は太刀を振るう。

その心が叫ぶ。

どうして!

それは八年の間、ロアが叫びつづけてきた言葉と同じだつた。

どうして家族は死ななければならなかつたのか。

どうして自分が生き残つたのか。

どうして。

ふつと、周囲が元に戻つた。

( 夢……? )

どちらにせよ、一瞬の出来事だつたらしい。まだロアの手は、ルーフェイアの白い首を締め上げていた。

ブレスレットの石は、まだ淡い光を放つてゐる。

少女と田が合つた。

そこにあつたのは、恐怖でも悲しみでもない。

どこまでも深い、絶望。

その絶望した瞳から、涙がこぼれる。

（どうちも、地獄か……）

ロアはそっと、手を離す。

「……ごめん」

その言葉に、少女は咳き込みながら首を振った。  
さらにじしまく咳き込んで、やつとかすかに声を出す。

「あたしが……いけないんです……。血に染まつた手で……夢を叶  
えたいなんて……」

ロアが回復魔法をかけてみると、彼女はよつやく咳き込むのを止  
め、涙に濡れた顔を上げた。

「ルーフェイア……」

彼女が、そして自分がその手に握り締めるものは、希望ではなく  
絶望。

「あたしみたいな人間、戦場の外に、出たらいけなかつたんです。  
生き延びるんじやなかつた。死んじやえばよかつた……」

その同じ言葉を、自分も何度も繰り返しただろう。  
だから、言えた。

「……そんなこと、ないよ

殺す側と殺される側、結局どちらも違わなかつたのだ。

理不尽な状況に放り込まれ、振り回され、ただひたすら生き延び  
るのに精一杯だった。

選びたても、選ぶ余地さえなかつた。

「あたしも辛かつたけど、ルーフェイアも辛かつたね……」  
泣きじゃくる少女の頭をなでてやる。少なくともこの子は、悪くない。

「のくらいせつしていただろう?」

よしやくルーフェイアが泣くのをやめた。

その彼女に、しばらくためらってから尋ねる。

「あのれ……キミはこれで、いいの? 学院にいたら、また……」  
戦わなくてはならない、その言葉は言えなかつた。だが察したのだろう、ルーフェイアがあまりにも悲しい微笑みを見せる。

瞬間、ロアは悟つた。

この子は つかの間の夢を見に、ここへ逃げてきたのだと。  
シユマーリーという家が、少女に何かを強いている。けれどこの子は  
それから逃れたくて、なのに逃れることは出来なくて、今だけでも  
とここへ来たのだ。

なぜこの子を学院長がルールを無視し、直接ここへ入学させたのか。その疑問も氷解する。

「ばか」

ロアはルーフェイアを抱きしめた。

ならばせめて、ここに居る間だけでも、その手に握るのは希望にしてやりたい。笑顔でいさせてやりたい。

「ひとりで抱え込んだら、ダメなんだよ」

ロアの言葉に、再びルーフェイアの瞳から涙がこぼれた。  
もし妹が生きていれば、こんなふうに腕の中で泣いだらうか?  
いざれにせよ、傷ついた心でまだ立とどとする彼女が、いとおしかつた。

どれほど辛かつただらう。どれほど苦しかつただらう。

同じ苦しみを味わつた、自分と少女。

腕の中で泣く彼女のぬくもりを感じながら、ロアは心に決める。たつた一年で命を終えてしまった妹への、哀悼の意味も込めて。

ボクが、姉さんだよ。

あとがき

最後まで読んでください、ありがとうございます。前作・前々作とともに、感想等いただけたらうれしいです。

なお、明日より第4作「葛藤」の連載となります。

お知らせ

このところ「小説家になろう」で読むのが、非常に重くなっています。

筆者サイト経由ですと比較的スムーズに繋がりますので、ブックマーク等でどうぞご利用ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9282d/>

抱えきれぬ想い ルーフェイア・シリーズ03

2011年2月6日14時24分発行